

令和7年度

「大学生の力を活用した集落復興支援事業（実態調査）」

西会津町奥川地区真ヶ沢集落

業務実施報告書

令和8年2月28日(土)

JVR (Joshibi Visible Right)

目次

1. はじめに	3
1-1 チーム紹介	
1-2 本活動の背景	
1-3 本年度の目的	
2. 真ヶ沢集落の概要	5
2-1 位置・地理的特性	
2-2 歴史的背景	
2-3 文化資源と生活環境	
3. 活動概要	8
3-1 活動期間	
3-2 活動内容	
3-3 現地滞在スケジュール	
4. 調査および活動結果	19
4-1 活動前に抱いていた地域イメージ	
4-2 実際に活動して見えてきた集落の実像	
4-3 地域資源の可視化	
5. 活動を通して明らかになった課題	19
5-1 高齢化と担い手不足	
5-2 地域内での受け止め方の差異	
5-3 一過性イベントへの依存リスク	
6. 今後に向けての展望	
6-1 地域資源の可視化	21
6-2 次年度具体計画	
6-3 『芸術を「翻訳装置」とする可能性』	
謝辞・参考資料	28

1. はじめに

1-1 チーム紹介

私たちは女子美術大学に在籍する学部1・2年生を中心に構成された同好会「JVR（Joshibi Visible Right）」である。

空間表現、版画、デザイン、ファッションを用いた表現、など異なる専門領域を学ぶ7名の学生が融資で集まり、分野横断的な視点から地域と芸術の関係を探究している。

本活動では、集落外からの集客を目的とした一過性のアートイベントの実施ではなく、住民との対話や調査を通して地域の内側にある価値を可視化し、集落の豊かさを再発見・再構築することを目的としている。調査・記録・表現実践を通じて、地域の新たな見方を生み出す可能性を検証していく。

1-2 本活動の背景

JVRは2024年6月に創設された女子美術大学の学生による同好会である。活動初期は「身近な社会について話し合い、ZINEを作る」ことを目的としていた。メンバーそれぞれの活動を通して、西会津国際芸術村や「やどりぎ案内」など、西会津町において地域に根ざしたアート活動が継続的に展開されていることを知り、都市部から離れた地域における芸術実践に関心を抱くようになった。

活動拠点である真ヶ沢集落には、JVRの顧問である西尾がコーディネーターとして関わった 古川利意記念美術館「農とくらし」が存在する。この美術館は、会津の暮らしを描き残した古川利意氏の作品の展示および、民具や農具などの地域資料の保存や、西会津を訪れる芸術家の作品の展示を行っている。会津の暮らしと芸術が交差する希有な空間と言える。

私たちはこの拠点を起点とし、美術を学ぶ学生としての視点を生かしながら、集落と関わる新たな可能性を模索することを本活動の出発点とした。



**古川利意記念美術館
農とくらし**

会津地域で数代・作家・郷土史家として活躍した文化人、古川利意さんの作品を中心に、地域資料から現代アートまで幅広く鑑賞できる「会津のくらし」をテーマとした小さな美術館。2022年7月に開館しました。

築150年の蔵を美術館にする計画を地元の有志や県内外の芸術家や建築家とともにプランニングし、また改修も行なうなど、立ち上げ過程を、地域住民と芸術家らが交流しながら作り上げた手作りの美術館です。



図1：農とくらしの写真

出典：©古川利意記念美術館「農とくらし」(<https://ftmg.localinfo.jp/>)

1-3 本年度の目的

初年度である本年度は、

○地域住民との信頼関係の構築

○集落の現状把握

○生活文化の記録

○今後の活動基盤の形成

を主目的とした。本年度の実態調査を通して、目に見える成果物の制作ではなく、継続可能な関係を築くための交流を最優先とした。



図2.3.4.5：真ヶ沢集落で学生が住民に聞き取り調査を行う様子

2. 真ヶ沢集落の概要

2-1 位置・地理的特性

真ヶ沢集落は福島県西会津町奥川地区に位置する山間集落である。冬季は積雪量が多く、田畑や山に囲まれており、四季の変化が生活様式に大きな影響を与えている。

集落の距離は狭く、中心を通る福島県道383号熱塩加納山都西会津線を集落のはじめから終わりまで測るとおおよそ500mで、徒歩10分程度で集落の端から端まで歩くことができる。



図6：福島県地図（赤色が西会津町）



図7：西会津町白地図

出典：Map-It マップイット(c) (<https://x.gd/Mz3mX>)



図8：真ヶ沢集落の航空写真



図9：真ヶ沢集落の地図

2-2 歴史的背景

『矢部氏系譜』によると真ヶ沢集落は、室町時代中期（1449年）に言及がある。当時奥川で領民を苦しめていた三賊（反田源左衛門、柳沢斉藤、田中越中）を、矢部氏の祖先がこの地を治めていた普名家の命によって退治したというものである。古川利意の記述によれば、三賊が居を構えていたとされる山城跡は現在も集落内に残存していると伝えられる。討伐を行ったとされる矢部氏の系統は現在も集落内に続いており、ミネラルトマトを栽培する矢部勝義氏はその末裔にあたるとされている。

米農家が有名な他の奥川地区の集落とは違い、真ヶ沢集落は商店、糶屋、茅葺屋根の職人、トマト農家、豆腐屋など、商いを基盤とした家が連なり、家族単位の暮らしが連綿と続いてきた。近年では高齢化や過疎化が進み、祭の神などの地域行事は廃止されつつある。一方で、住民同士の結びつきは強く、「結」や自治会の取り組みが重視されている。

一方で、真ヶ沢集落に関する口承記録は他の奥川地区より少なく、隣の中町集落で有名な「地藏」や出ヶ原集落の「河童」などの特徴的な物語は見受けられなかった。今後の活動を通して真ヶ沢集落の物語を発見していきたい。

2-3 文化資源と生活環境

○雪と共存する暮らし

真ヶ沢集落は豪雪地域に位置し、冬季の積雪量は非常に多い。民家では2階部分に達する積雪が生じる場合もある。冬季は毎日除雪車が運行され、夜間は路面凍結防止のために消雪用の水を流し続けるなど、継続的な除雪対策が不可欠である。各家庭では暖房器具を併用し、防寒着や長靴などの装備を整えたうえで日常生活を送っている。車両運転時の安全確保や、屋根からの落雪対策も重要な課題である。

このように、真ヶ沢集落では雪と向き合うことが生活の前提となっており、豪雪環境に適応した暮らしの知恵や生活様式が形成されている。雪と共存する生活文化は本地域の重要な特色の一つである。



図10.11：実際の真ヶ沢集落の雪の様子

○空き家・空き地

真ヶ沢集落には22戸が所在しているが、そのうち約半数は現在空き家となっている。人口減少および高齢化の進行に伴い、居住機能を失った住宅や未利用地が増加している状況である。空き家の増加は、防災・景観・維持管理の面で課題を生じさせる一方、将来的な活動拠点や地域交流の場として活用できる可能性も有している。

実際に、集落内では移住者が空き家を改修し、コワーキングスペースや集会、作業の場として活用している事例も確認された。

今後は、所有関係や維持管理状況を整理しつつ、地域の意向を踏まえた活用の方向性を検討する必要がある。

○移動販売車

真ヶ沢集落には「福島屋」があり、生活に必要な物資を販売している。地域内における基礎的な購買機能を担う存在である。また、真ヶ沢集落は奥川地区の比較的南部に位置するが、極入集落や弥平四郎集落では商業機能がほぼ存在していない。そのため、福島屋が運行する移動販売車は、これら周辺集落にとって重要な生活インフラとなっている。

移動販売車は単なる物資供給の手段にとどまらず、高齢者の見守りや住民同士の交流の機会としても機能している。真ヶ沢集落のみならず、奥川地区全体の生活を支える役割を果たしている。

以上のように、真ヶ沢集落に見られる雪への適応、空き家の存在、移動販売車の運行といった諸要素は、観光資源として特別に演出されたものではなく、日々の生活の営みの中で培われ、現在も継続しているものである。これらは地域住民の暮らしの延長線上に存在するものであり、真ヶ沢集落の生活文化を構成する基盤であるといえる。



図12：真ヶ沢集落から奥川最奥の弥平四郎集落まで食材を届ける移動販売車の様子

3. 活動概要

3-1 活動期間

令和7年度は、大学の長期休暇期間を中心に夏、秋、冬に計4回滞在した。

3-2 現地滞在での活動内容

○住民への聞き取り調査と顔合わせ

各世帯を訪問し、自己紹介を行ったうえで、日常生活の様子や過去の暮らし、現在の課題、地域の出来事等について聞き取りを実施した。住民から声をかけていただき、茶話を共にしながら対話を重ねることで、形式的な調査にとどまらない信頼関係の構築に努めた。これらの対話を通じて、生活文化や地域の記憶に関する基礎情報を収集するとともに、今後の活動に向けた継続的な関係性を形成することができた。

本年度の活動は、この聞き取りと顔合わせを中心として展開しており、住民との継続的な信頼関係の形成を最も重要な目的として位置付けている。



図1 3：住民への聞き取り調査の様子



図1 4：民家を回る様子

○ 雪かき等の生活支援

2月上旬の滞在時には、集会所および消火栓周辺の除雪作業を実施した。豪雪地域において除雪は生活基盤を維持するうえで不可欠であり、住民の安全確保および地域機能の維持に寄与する支援活動として位置付けられる。調査にとどまらず、生活の現場に参加することを通じて関係性の深化を図った。

○ 写真・音声記録

季節によって変化する景観、住民と学生の関わりの様子、聞き取りの場面等を写真により記録した。また、会津弁による昔語りについては音声録音を行った。これらの記録は、地域の生活文化や関係性の可視化を目的とするものであり、今後の整理・編集・アーカイブ化に向けた基礎資料となる。

○ 備忘録の作成

滞在中に得られた知見や住民からの発言、学生各自の気づき等をGoogleスライド上で記録・共有し、活動内容の整理および振り返りを行っている。情報を蓄積・共有する体制を整えることで、継続的な調査・検討を可能とした。

3-3 現地滞在スケジュール

第一回目 2025年8月6日～2025年8月9日 学生6名 教員1名

本調査では、西会津町全体における美術活動の動向把握および移住している若年層の活動実態の確認を目的とし、真ヶ沢集落に限定せず、西会津町内各地を移動しながら視察・聞き取りを行った。実際に歩き、対話を重ねることで、地域の地理的・文化的スケールを身体的に把握することを重視した。

○2025年8月6日

奥川みらい交流館を訪問し、中町集落区長の岩橋氏および役場職員の青津氏に挨拶を行った。集落支援員の岩橋氏からは中町で過去に実施された大学生事業について詳しく聞き、西会津町および奥川地区の概要について説明を受け、その後、奥川まちづくり協議会の会議を傍聴した。地域住民のみならず、上野尻地区の関係者や映画監督など、多様な立場の参加者が集い、奥川の将来について議論している現場を直接見る機会となった。

真ヶ沢集落へと移動し、集落内での活動サポートをいただいている小野木氏に挨拶、また、小野木氏が運営する古川利意記念美術館「農と暮らし」の視察をし、暮らしをのこしてゆくことの重要性について考える機会となった。



図15：奥川みらい交流館での交流の様子

○2025年8月7日

野沢地区にてやまあみ鞆工房を訪問し、革製品制作の現場を見学するとともに、害獣問題と地域産業の関係について話を伺った。野沢地区を徒歩で散策し、マチとムラ(中心部と山間地区)の違いを観察した。

その後、中町集落にある90歳の夫婦が経営する「さかや」にて移住者の森田氏と交流。奥川の歴史について話を伺う。また、奥川みらい交流館にて地図を用いて奥川全体の地形を確認し、岩橋氏より弥平四郎集落についての話を聞いた。2階の資料室に行ったことにより、奥川地区の暮らしの歴史触れた。

最後に松尾集落へ移動し、縄文土器の複製を行う方に話を伺った。

真ヶ沢集落に戻り、「ミネラルトマト」を視察し、生産現場を見学した。また、小野木氏との交流し、地域に自生するごんばっぱを用いたお菓子をいただく。また、参観地域特有の山菜についてのお話も伺い、この地区の植生についても興味を持つ機会となった。

また、真ヶ沢集落に最近移住されたアーティストや東京と西会津を行き来しながら制作をしているアーティストと交流し、奥川地区を舞台に制作活動を行っている芸術家の活動を直接知る機会となった。



図16：西会津と縄文土器のお話を伺う様子

図17：やまみ鞆工房への訪問

○2025年8月8日

地域の文化を支える主要な施設である、西会津国際芸術村を訪問し、展示を鑑賞するとともに施設の歴史やこれまでの活動について学んだ。ディレクターの矢部氏より、長年の運営経験や、地域住民と若年層との意識の差、活動を継続する難しさについて話を伺った。

移住者が多い地区を言われている上野尻地区への視察では、祭りの練習に参加し、地域行事の準備過程を体験した。また、シェアハウス「あすのや」を訪問し、元地域おこし協力隊であり、町内で起業した合同会社「あすの舎」の方々にお話を伺った。同施設は地域協力隊や若年層が集うコミュニティの場であり、居住機能も備えた空間であることを知り、今後の地域拠点のあり方を考えるうえで参考となった。



図18：西会津国際芸術村にて矢部氏を訪問

図19：「あすのや」を訪問

○2025年8月9日

真ヶ沢集落を徒歩で巡回し、地形や家屋配置、沢の流れなどを確認した。実際に歩くことで、西会津町、奥川地区、真ヶ沢集落それぞれのスケール感を身体的に把握することができた。

また、集落名の由来ともなっている湾曲した沢や奥川の流れを現地で確認し、地名と地形の関係についても調査を行った。

本滞在は、真ヶ沢集落単体の調査に入る前段階として、西会津町全体の文化的・地理的文脈を把握するための重要な導入調査であった。



図20：真ヶ沢集落にある奥川を調査

第二回目 2025年11月2日～2025年11月3日 学生4名 教員1名

本調査では、真ヶ沢集落での住民への聞き取りと顔合わせおよび地域資源の把握を目的として、複数世帯を訪問し交流・記録活動を行った。

○2025年11月2日

荒海氏宅を訪問し、幼少期の集落での暮らし、荒海家の本家・分家の歴史、若年期の東京での就労経験などについて聞き取りを実施した。

真ヶ沢集落にある商店、「福島屋」を訪問し、今後の集落内での活動について意見交換を行った。福島屋に隣接する空き地や移動販売車の活用方法について具体的な助言をいただき、これからの活動を構想した。



図2 1：荒海氏宅で話を伺っている様子



図2 2：福島屋で活動の相談を行なっている様子

集落内で小野木氏が営むカフェ「茶房 石竹花（なでしこ）」を訪問した。実際に食事をしながら利用者層や地域内交流の実態を身をもって体験した。同所は住民同士の交流拠点として機能しており、世代を超えたコミュニケーションの場となっていることを認知した。

集落北部に居住する佐藤氏宅を訪問し、過去の真ヶ沢集落での生活様式や奥川の唯一の教育機関であった奥川小学校・奥川中学校に通われていた頃のお話を伺った。地域独自の地図資料やハザードマップも確認し、住民の家の位置関係および地理的特性について情報収集を行った。



図2 3：小野木氏が営むカフェ「茶房 石竹花（なでしこ）」



図2 4：集落北部に居住する佐藤氏宅

○2025年11月3日

奥川地区に伝わる口承文化の記録を目的とし、梨平集落に住む玉木氏より、会津弁による「昔語り」の聞き取りを実施した。

内容は、奥川地区全体の昔から語り継いでいる物語を昔語り特有の語り口調でお話していただいた。お話の中は、弥平四郎地区を起点として発展していった経緯、中町地区が学校・郵便局・農協等の機能を有し地域の中心として栄えていたことなどが語られた。一方で、真ヶ沢集落単体に関する物語は語られなかった。このことから、真ヶ沢集落に特化した歴史情報の整理には、別途詳細な聞き取りや西会津町史などの文献を参照にする必要があると判断される。

また、会津弁による語りは若年世代にとって聞き取りが難しく、口承文化の継承には記録・翻訳・再編集等の作業が重要であることが明らかとなった。録音データは今後、文字起こしおよびアーカイブ化を行い、地域資源として活用する予定である。

なお、真ヶ沢集落に関する詳細な歴史については、小野木正則氏が最も精通しているとの情報を得た。今後の重点的聞き取り対象者として位置付ける。



図25：玉木氏による昔語りの様子

以上の調査を通じて、真ヶ沢集落における生活史・インフラの基礎的情報を収集するとともに、複数世帯との関係性を構築することができた。会津弁による昔語りの音声記録を取得できたことは、地域固有の言語文化を保存するうえで重要な成果である。

また、集落単体の歴史整理には追加的な聞き取りおよび文献調査が必要であること、地域内には交流拠点や活用可能なスペースの存在が明らかとなった。これらは、次年度以降の具体的な表現活動・記録制作・地域連携事業へと展開するための基盤となるものである。

本調査は、真ヶ沢集落の文化的資源を可視化し、持続可能な活動へと発展させるための準備段階として位置付けられる。

第三回目 2025年11月22日～2025年11月24日 学生4名 教員1名

本調査では真ヶ沢集落内にある商店「福島屋」との今後の活動についての話し合いと真ヶ沢集落以外の文化調査を行った。

○2025年11月23日

「福島屋」へ訪問、極入集落のそば職人、弥平四郎の方など真ヶ沢集落以外の住民の方との交流をし、生活面でのお話を伺った。

また、西会津町内での芸術活動の調査として、西会津国際芸術村スタッフであり在住アーティストそら氏と交流を行った。ものづくり作家の方や協力隊で狩猟担当の方とも交流する機会をもてた。

○2025年11月24日

福島屋の移動販売車装飾プロジェクトの話し合いや、販売車や空き地実地調査を行った。

真ヶ沢集落の住民の方々に、農業の現状や害獣被害についてお話を伺った。対話の中では、離郷者や移住者の働き方の実情にも話題が広がり、集落の方々からは「移住してくれることは歓迎しているが、移住後の働き口についてどのような選択肢があるのかを知りたい」という声が聞かれた。

私たちは、移住者と長年地域に暮らしてこられた住民双方の状況を比較的把握しやすい立場にあることから、両者をつなぐ橋渡し役として何ができるのかを模索する契機となった。

小野木氏のお宅にて小屋を見せて頂く。小屋の二階には、民具や農機具などを拝見、民俗資料として貴重なものを見せていただいた。

集落を隅々まで歩き、生活の跡や植物、動物の足跡など様々な気づきがあった。

今後の冊子の制作や、制作活動においての素材選びの一つとして、西会津町の重要な文化産業である、出ヶ原和紙について、復元を行った滝沢氏にお話を伺った。出ヶ原和紙の資料、工芸や歴史の本、ZINEでの和紙の活用例、伝統工芸について、一度途絶えた出ヶ原和紙の復元に至るまでの道のりなど伺った。和紙作りは元々畑仕事のできない冬で行われた仕事であること、継続の難しさ、地域全体で和紙の復元に取り組んでいることを知る。



図 2 6：集落を調査している様子



図 2 7：出ヶ原和紙工房の滝沢氏にお話を伺っている様子

これらの調査から、集落内を時間をかけて巡ることで日常的に集う住民の方と交流ができ、また、集落の生活の一部を知ることができた。集落内を自分たちの足で調査することで集落の地図感覚を身につけることができた。また、生活の跡や植物、動物の足跡など集落を見つめることで発見があった。それは季節によっても変化があるものである。このリサーチ方法は継続していきたい。

出ヶ原和紙工房にて民俗資料を拝見させて頂いたり、集落との関わり方などのお話を聞けたことはこれからの活動に非常に役に立つものであった。それぞれの集落によって文化や残存している情報も異なる。しかし、それらの情報の集める手段や集落へ還元していくようなプロセスを学習できたことが大きな収穫であった。

第4回目 2026年2月7日～2025年2月11日 学生7名 教員2名

本滞在では、豪雪期における真ヶ沢集落の生活実態の把握を主目的とし、積雪環境下での暮らしの様子の調査を行った。あわせて、福島屋の移動販売車の実態調査および報告会への参加を実施した。

○2026年2月7日

真ヶ沢集落にて福島屋への挨拶訪問、奥川支所にて集落支援員と中町集落の区長を兼任する石橋氏へ挨拶訪問を行い、今後の方針について相談をした。

また、西会津町雪国まつりが開催されていたため、さゆり公園にて「歳之神」を見学し、地域の冬季行事を体験した。

宿泊施設「結」に滞在し、豪雪地域における寒冷環境を実体験として理解した。あわせて、住民へ配布するポストカードの制作を行った。

○2026年2月8日

小野木家を訪問し、除雪作業を手伝った。集会所や消火栓まわりの除雪を行った。豪雪期における日常的な労力や生活上の負担を体感する機会となった。

福島屋を訪問し挨拶を行うとともに、移動販売車の車両寸法の採寸を実施した。

小野木家にて、屋根の雪が積もっている庭にて、かまくらを制作した。完成後は蝋燭を灯し、小野木氏と共に暖かさを感じた。地域の方の喜びにつながるアートに関しても考えるきっかけになった。



図28：小野木麗子さんと共にかまくらで暖をとる様子

○2026年2月9日

住民に顔と名前を覚えてもらうことを目的として名札を着用し、集落内の全世帯にポストカードを配布した。小野木氏の協力のもと、各戸に活動内容を改めて説明し、集落の力になりたいという旨を周知した。

また、福島屋の移動販売車に同行し、販売経路や停車場所、利用状況等を調査した。民家が密集する集落は停車して販売する場所がある固定されているが、民家が離れている集落や高齢で足腰が不自由な住民に対しては、一軒一軒訪問しており、移動販売車が山間地域の生活を支えている実情を認識した。



図29：ポストカードを配る様子



図30：移動販売車の集落訪問の様子

○2026年2月10日

これまでの調査や活動を踏まえ、報告会に向けた打ち合わせおよび資料確認を行った。

○2026年2月11日

報告会へ参加し、本年度の活動内容を共有した。交流会では、他大学の活動を知り比較することができた。終了後、学生・教員間で振り返りミーティングを実施し、今後の課題整理を行った。

本滞在は、積雪期における生活実態を身体的に理解するとともに、移動販売車の役割を具体的に把握する重要な調査機会となった。



図31：報告会の様子

4. 調査および活動結果

4-1 活動前の地域イメージ

活動前は「過疎化が進む静かな山村」という印象を抱いていた。私たち学生を受け入れてもらえるか不安に感じていた。しかし、関わっていくうちにそのイメージとは真逆のものに変わった。

4-2 実際の集落の実像

実際には、住民同士の強い結びつきがあり賑やかで力強い関係性があった。また、住民一人ひとりが自立した生活文化を持っている。衣食住の端々から生活の知恵やもてなしの気持ちがあり、そこには小さな誇りの積み重ねが存在していた。

真ヶ沢集落を超えて奥川全体のインフラを支えている「福島屋」「伊勢屋」で働く人々や、週末にカフェを営む「茶房 石竹花（なでしこ）」の存在をはじめとして、住民の健康的なタフネスや優しさを心から実感した。私たち学生がインターホンを押して訪問をすると、にこやかに受け入れてくださり「お茶でも飲んで行きなさい」と家を上げてくれる。今年度の滞在を経て、優しさや生きていく力という、外部からは見えにくい価値を数多く確認した。

4-3 地域資源の可視化

集落の入り口から地域資源がある。矢部氏のミネラルトマト、かつては遠方からも買う人がいたという豆腐、古川利意記念美術館「農とくらし」、茶房 石竹花（なでしこ）、伊勢屋、福島屋、猫達、どれもその存在を残し得るものである。

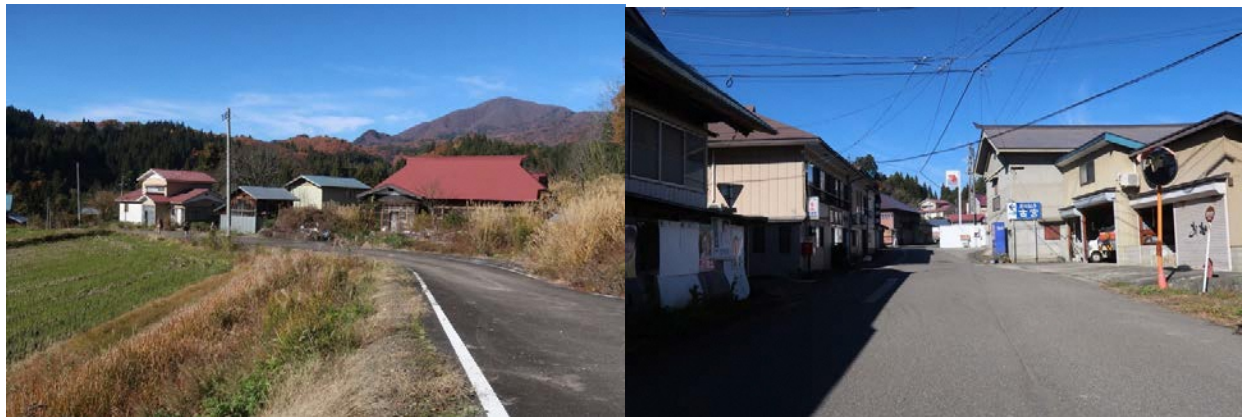


図32、33：真ヶ沢集落

5. 明らかになった課題

5-1.高齢化と担い手不足

現在、真ヶ沢集落には12戸、20名が居住している。高齢化率は約70%に達しており、地域の維持運営において大きな課題となっている。

地域内の商業機能である「福島屋」および「伊勢屋」は、いずれも高齢者がパートタイムで従事しており、継続的な運営体制は脆弱な状況にある。

また、かつて営業していた豆腐店はすでに廃業している。今後、生活基盤となる商業・生活インフラについても、維持継続が困難となる可能性が懸念される。

5-2.地域内での受け止め方の差異

真ヶ沢集落では、移住者による活動や外部人材との交流が継続的に行われている。しかし、住民の受け止め方は、必ずしも一様ではない。外部からの取り組みに期待を寄せることがある一方で、関心を示さず静観することもある。また、豪雪環境下での暮らしや、移動販売車を中心とした日常の支え合いといった地域固有の生活文化があるが、その価値や意味があらためて言語化され、住民間で共有されているわけではない。それらは長年続いてきた「当たり前」の営みであり、改めて語る必要がないものとして扱われてきた可能性がある。

しかし、住民が20人程度という極めて小規模な集落においては、意見の違いや温度差が顕在化しにくい。強く主張することが関係性に影響を及ぼすことを無意識に避け、沈黙や曖昧さによって均衡が保たれている側面もあるのではないかと。結果として、地域内部に存在する多様な感覚や立場の違いは、表面化することなく内在化されている。

このような状況は、今後の地域づくりや外部との協働を進めるうえで、見過ごすことのできない課題である。外部人材の活動を前提に物事を進めるのではなく、地域内部に存在するさまざまな意見や沈黙の姿勢を丁寧に調査し、それぞれが無理なく共有できる方法を探ることが求められる。地域の持続性は、外からもたらされる活性化だけではなく、内側の多様な声が認識されることによって初めて支えられると考える。

5-3.一過性イベントへの依存リスク

本年度の活動を進めるなかで、女子美術大学内での特別授業において、現代美術作家であり都市環境アートのプロジェクトを手がける 陸根丙（ユック・クンビョン）氏に助言を求める機会を得た。

その際に指摘されたのは、「地域活性化」を目的に掲げることの危うさであった。私たちは当初、人を呼び込むことや外部との接点を増やすことが、地域にとって前向きな変化をもたらすと考えていた。しかし陸根丙氏は、外部からの刺激やイベント的な盛り上がりは、ときに住民にとって負担や脅威となりうる」と指摘した。

活性化は目標として掲げるものではなく、信頼関係の積み重ねや、地域がすでに持っている営みを丁寧に観察し、記録し、共有する過程のなかで結果として立ち現れるものであるという助言であった。

この指摘は、本活動の方向性を再考する契機となった。短期的な注目や外部評価を優先するのではなく、真ヶ沢集落に既に存在する生活文化や関係性を尊重し、その形を大きく変えない方法を模索する必要があると認識した。その結果として、一過性のイベント型事業ではなく、日常の延長線上にある実践として、移動販売車の装飾計画、ZINE(小冊子)の制作、昔語りの絵本化といった取り組みが立ち上がっている。これらは外部向けの演出ではなく、地域内部で無理なく受け入れられる形での可視化を目指すものである。

本章で述べたように、一時的な盛り上がり依存する構造は、持続的な関係形成を阻害するリスクを孕む。本活動はその反省を踏まえ、長期的視点に立った実践へと軸足を移していく。

6. 今後に向けて

6-1 地域資源の可視化

本活動を通して、真ヶ沢集落には外部に向けて明確に提示されていない多層的な地域資源が存在していることが明らかとなった。豪雪環境下での生活の知恵、移動販売車を介した関係性、語られつつも記録されていない昔語りなど、それらは日常の中に埋もれ、体系的に共有されているとは言い難い状況にある。

次年度は、これらの資源を一過性の表現にとどめるのではなく、地域内外で共有可能な形へと可視化することを目標とする。

○移動販売車装飾案

集落内商店「福島屋」の店長と協議のうえ、現在無地で運行している移動販売車の装飾を計画している。福島屋の移動販売車は、真ヶ沢集落のみならず奥川地区全体にとって生活を支える基盤であり、高齢者の見守りや交流の契機ともなっている。しかしその役割や価値は、日常性ゆえに十分に可視化されていない。

本計画では、単なる装飾的デザインではなく、地域の風景や人の営みを反映させることで、「走る生活文化の媒体」として再定義することを目指す。日常の移動経路そのものを展示空間へと転換し、地域の価値が自然に共有される状況を創出する。

これは、生活インフラと芸術実践を接続する試みである。



図34：福島屋の移動販売車



図35：弥平四郎での移動販売車の様子

○集落マップ制作

今年度の滞在では、建物や地形といった物理的な資源のみならず、対話の中で得た発見や感情の動きなど、数値化できない価値が数多く存在することを実感した。

これらを整理・再構成するため、オリジナルの「集落マップ」を制作する。単なる地理情報の提示ではなく、生活の記憶や印象を重ね合わせた重層的な地図とすることを目指す。

今後はこのマップを住民と共有し、意見や記憶を書き加えてもらうことで、地域内対話の媒体として発展させたい。さらに、町内外で展示することで、真ヶ沢集落の生活像を立体的に伝える。



図 36：再編集中のマップの図

○ZINE(小冊子)制作

滞在を通して得た気づきは、必ずしも肯定的な側面だけではない。害獣問題や豪雪による負担、空き家の増加など、課題もまた地域の現実である。

それらを断片的な印象として終わらせず、ポジティブな発見と課題の双方を含めた記録としてZINE(小冊子)を制作する。外部向けの広報物ではなく、私たち自身の思考の軌跡を含んだ編集物としてまとめることで、地域理解のプロセスを可視化する。

○昔語りの絵本化

極入集落のタエ氏より聞き取った昔語りは、現在口承の形でのみ存在している。音声記録をもとに、その語りを絵本として再構成することを検討している。高齢化が進行する中で、語りの担い手が減少することは避けられない。物語を記録し、次世代へ手渡す媒体を制作することは、文化的継承の一助となり得る。

単なる再話ではなく、聞き取りの過程や語りの背景も踏まえた形で構成することで、生活と物語の関係性を表現する。

6-2 次年度計画

本年度の活動を通して、真ヶ沢集落には外部からは見えにくい生活文化や関係性が数多く存在する一方、それらが十分に共有・記録されていない現状が明らかとなった。次年度は、その「見えにくい価値」を地域住民との協働を通じて具体的な形へと結実させる段階へ移行し、単なる調査の継続ではなく、実装と還元を重視する。

① 福島屋移動販売車装飾プロジェクト

1. 何を行うか

福島屋の移動販売車を対象に、地域の生活文化を反映したデザイン装飾を制作し、実際に施工する。単なる装飾ではなく、移動販売車を「地域の語り部」として再定義する。

2. 誰と行うか

- ・ 福島屋店長
- ・ 真ヶ沢集落住民
- ・ 奥川地区住民
- ・ 女子美術大学学生メンバー

制作過程において住民ヒアリングを実施し、図案への反映を行う。

3. 成果物

- ・ 実装された移動販売車装飾
- ・ 制作プロセス記録（写真・テキスト）
- ・ 住民反応の聞き取り記録

4. 継続性の仕組み

装飾完成後も、住民からの意見を反映し更新可能な設計とする。将来的には奥川地区内他集落への展開可能性を検討する。本計画は、地域資源の消費的演出ではなく、生活インフラそのものを「地域の語り部」として再定義する試みである。日常の移動経路を媒体とし、自然な対話を生む環境づくりを目指す。現時点で想定している移動販売車装飾の製作スケジュールは以下の通りである。

時期	製作内容（場所）	大学生事業
4月上旬	デザイン案出し（東京）	応募開始
5月下旬	デザイン決定&素材探し（東京）	申請作業
6月下旬	試作検討（東京）	委託事業開始
7月下旬	実際の移動販売車へ装飾する（真ヶ沢）	現地活動
8月上旬	追加の装飾作業&住民の反応を調査（真ヶ沢）	現地活動

表1：移動販売車の製作スケジュール

○世帯訪問ポストカード

1. 何を行うか

学生の活動報告および近況を掲載したポストカードを制作し、全世帯を訪問して配布する。

2. 誰と行うか

- ・真ヶ沢集落全世帯
- ・女子美術大学学生メンバー

3. 成果物

- ・季節ごとのポストカード（年2回制作想定）
- ・配布記録および住民の声の記録

4. 継続性の仕組み

毎年度継続実施し、アーカイブ化する。蓄積されたポストカードは、将来的に小冊子として再編集可能な形で保存する。

本事業は小規模であるが、継続的関係構築の基盤を担う重要な事業と位置づける。



図35：2026年度2月に集落の住民に配布したチラシ

③ 真ヶ沢生活史・物語アーカイブ事業

1. 何を行うか

- ・昔語りの収集
- ・生活史インタビューの実施（3～4名程度想定）
- ・音声および文字起こしデータの整理

2. 誰と行うか

- ・高齢住民
- ・移住者
- ・女子美術大学学生メンバー

3. 成果物

- ・音声データアーカイブ
- ・文字起こし資料
- ・編集ダイジェスト冊子

4. 継続性の仕組み

データはデジタル保存し、翌年度以降の作品制作・展示・冊子化に活用する。継続的な記録体制を構築する。本事業は、語り手の高齢化を踏まえた緊急性を有する。

④ 現地展示および都市部展示（成果還元事業）

1. 何を行うか

制作成果および記録資料を展示形式で公開する。

2. 誰と行うか

- ・ 真ヶ沢集落住民
- ・ 奥川地区住民
- ・ 女子美術大学関係者
- ・ 一般来場者

3. 成果物

- ・ 真ヶ沢集落内小規模展示（集会所等）
- ・ 女子美術大学内展示

4. 継続性の仕組み

展示は一方的発表ではなく、住民からの意見を収集し次年度制作へ反映する循環型モデルとする。

総括

次年度は、「調査」から「実装・共有・循環」へ移行する年度と位置づける。

各事業は単独で完結するのではなく、

○移動販売車装飾 → 生活文化の可視化

○ポストカード → 関係の継続

○物語記録 → 基礎資料形成

○展示 → 還元と再編集 という循環構造を形成する。本計画により、真ヶ沢集落に内在する生活文化を、外部依存型の活性化ではなく、内発的に共有可能な形へ転換するモデル構築を目指す。

6-2 まとめ 芸術を「翻訳装置」とする可能性

芸術は装飾ではない。それは、言葉になりきらない地域の記憶や感情、日常の営みを、他者へ手渡すための翻訳装置となり得る。

本滞在を通して、真ヶ沢集落には、外部からは容易に見えない価値が幾重にも存在していることを実感した。それらは壮大な観光資源ではなく、生活の中に静かに息づく知恵や関係性である。しかし、その多くは共有の形式を持たず、十分に可視化されているとは言い難い。

私たちは、それらを「作品化」すること自体を目的とするのではない。地域の内側にある感覚をすくい取り、整理し、別の文脈へと置き直すことで、内と外を接続する回路をつくることに意義がある。それは外部に向けた発信であると同時に、地域内部における再認識の契機でもある。芸術が介在することで、当たり前存在していた風景や営みが、全く別の形で立ち現れる可能性がある。

本活動は、地域資源を消費するのではなく、地域の記憶と向き合い、それを未来へ引き渡すための試みである。芸術を翻訳装置として用いることで、真ヶ沢集落の価値を一時的な話題ではなく、持続可能な共有資産として位置づけることを目指す。

謝辞

本活動にあたり、ご協力いただいた真ヶ沢集落の皆様、奥川支所の職員様、福島県地域振興課の皆様、女子美術大学関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

出典：©古川利意記念美術館「農とくらし」(<https://ftmg.localinfo.jp/>)

出典：Map-It マップイット(c) (<https://x.gd/Mz3mX>)

出典；国土地理院ウェブサイト (<https://x.gd/TOhu4>)

西会津町史編さん室編．「西会津町史 第6巻 下 (旧町村沿革)」．vol. 6巻, 西会津町, 西会津町史刊行委員会、1991年3月．